

蜃気楼

——或は「続海のほとり」——

芥川龍之介

青空文庫

或秋の午頃ひるごろ、僕は東京から遊びに来た大学生のK君と一しよに蜃気楼しんきろうを見に出かけて行つた。鵜沼うげぬまの海岸に蜃気楼の見えることは誰たれでももう知つていゝであらう。現に僕の家うちの女中などは逆まに舟の映つたのを見、「この間の新聞に出ていた写真とそつくりですよ。」などと感心していた。

僕等は東家あずまやの横を曲り、次手ついでにO君も誘うことにした。不あいか相わら変らず赤シャツを着たO君は午飯ひるめしの支度でもしていたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしていた。僕は秦皮とね

樹りこのステッキを挙げ、O君にちよつと合図をした。

「そつちから上つて下さい。——やあ、君も来ていたのか？」

O君は僕がK君と一しよに遊びに来たものと思つたらしかつた。
「僕等は蜃気楼を見に出て来たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜃気楼か？——」

O君は急に笑い出した。

「どうもこの頃は蜃気楼ばやりだな。」

五分ばかりたつた後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路みちを歩いて行つた。路の左は砂原だつた。そこに牛うしぐるま車の轍わだちが二すじ、黒ぐろと斜めに通つていた。僕はこの深い轍に何か圧迫に近

いものを感じた。たくま 逞しい天才の仕事の痕、あと ——そんな気も迫って来ないのではなかつた。

「まだ僕は健全じゃないね。ああ云う車の痕を見てさえ、妙に参つてしまふんだから。」

○君は眉をまゆひそめたまま、何とも僕の言葉に答えなかつた。が、僕の心もちは○君にははつきり通じたらしかつた。

そのうちに僕等は松の間を、——まば疎らに低い松の間を通り、引ひきしがわ地川の岸を歩いて行つた。海は広い砂浜の向うに深い藍あいろ色に晴れ渡つていた。が、絵の島は家々や樹木も何か憂鬱ゆううつに曇つていた。

「新時代ですね？」

K君の言葉は唐突だった。のみならず微笑を含んでいた。新時代？——しかも僕は咄嗟とっさの間にK君の「新時代」を発見した。それは砂止めの笹垣ささがきを後ろに海を眺めている男女だった。尤ももつと薄いインバネスに中折帽をかぶった男は新時代と呼ぶには当らなかった。しかし女の断髪は勿論もちろん、パラソルや踵かかとの低い靴さえ確に新時代に出来上っていた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨うらやましい仲間だろう。」

○君はK君をからかったりした。

蜃気楼の見える場所は彼等から一町ほど隔っていた。僕等はいずれも腹這はらばいになり、陽炎かげろうの立った砂浜を川越しに透かして眺

めたりした。砂浜の上には青いものが一すじ、リボンほどの幅に
ゆらめいていた。それはどうしても海の色が陽炎に映っているら
しかつた。が、その外には砂浜にある船の影も何も見えなかつた。
「あれを蜃気楼しんきろうと云うんですかね？」

K君は頤あごを砂だらけにしたなり、失望したようにこう言つてい
た。そこへどこからか鴉からすが一羽、二三町隔つた砂浜の上を、藍あいい
色いろにゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞まい下さがつた。
と同時に鴉の影はその陽炎かげろうの帯の上へちらりと逆まに映つて行
つた。

「これでもきようは上等の部だな。」

僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上つた。するとい

つか僕等の前には僕等の残して来た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いていった。

僕はちよつとびつくりし、僕等の後ろをふり返った。しかし彼等は不相変あいかわらず一町ほど向うの笹垣ささがきを後ろに何か話しているらしかった。僕等は、——殊に〇君は拍子抜けのしたように笑い出した。

「この方が反かえつて蜃気楼じゃないか？」

僕等の前にいる「新時代」は勿論もちろん彼等とは別人だった。が、女の断髪や男の中折帽をかぶった姿は彼等と殆どほとんど変らなかつた。

「僕は何だか気味が悪かつた。」

「僕もいつの間に来たのかと思ひましたよ。」

僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川ひきじがわの岸に沿わずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣すその裾すそにやはり低い松を黄ばませていた。O君はそこを通る時に「どっこいしょ」と云うように腰をかがめ、砂の上の何かを拾い上げた。それは瀝チ青らしい黒枠の中に横文字を並べた木札ヤシだった。

「何だい、それは？」 Sr. H. Tsuji …… Unua …… Aprilo …… Jaro …… 1906 ……」

「何かしら？ dua …… Majesta ……ですか？ 1926としてありますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸しがいについていたんじゃないか？」

O君はこう云う推測を下した。

「だって死骸を水葬する時には帆布か何かに包むだけだろう？」

「だからそれへこの札をつけてさ。——ほれ、ここに釘くぎが打つてある。これはもとは十字架じゆうじかの形をしていたんだな。」

僕等はもうその時には別荘らしい篠垣しのがきや松林の間を歩いてい
た。木札はどうも〇君の推測に近いものらしかった。僕は又何か
日の光の中に感じる筈はずのない無気味さを感じた。

「縁起でもないものを拾ったな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926とする
と、二十位はたちで死んだんだな。二十位と——」

「男ですかしら？ 女ですかしら？」

「さあね。……しかし兎とに角かくこの人は混血児あいのこだったかも知れない

ね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血児の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある筈だつた。

「蜃気楼か。」

O君はまっ直すぐに前を見たまま、急にこう独り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかつた。が、僕の心もちには何か幽かすかに触れるものだった。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇たたずんでいた。家の多い？

——しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかつた。

「K君はどうするの？」

「僕はどうでも、……………」

そこへ真白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて来た。

二

K君の東京へ帰った後、僕は又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡って行つた。今度は午後の七時頃、——夕飯ゆうめしをすませたばかりだった。

その晩は星も見えなかつた。僕等は余り話もせずに入げのない砂浜を歩いて行つた。砂浜には引地川の川口のあたりに火ほかげが

一つ動いていた。それは沖へ漁に行つた船の目じるしになるものらしかった。

浪なみの音は勿論絶えなかつた。が、浪打ち際へ近づくとつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸うみぐさや汐木しおぎの匂においらしかった。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上と感じた。

僕等は暫しばらく浪打ち際に立ち、浪がしらの仄ほのめくのを眺めていた。海はどこを見てもまつ暗だった。僕は彼かれ是これ十年前ぜん、上総かずさの或海岸に滞在していたことを思い出した。同時に又そこに一しよにいた或友だちのことを思い出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋い粥もがゆ」と云う僕の短篇の校正刷を読んでくれたりした。……

そのうちにいつか〇君は浪打ち際にしやがんだまま、一本のマッチをともしていた。

「何をしているの？」

「何ってことはないけれど、……ちよつとこう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでしょう？」

〇君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。

成程一本のマッチの火は海松みゆるふさや心太艸てんぐさの散らかった中にさまざまの貝殻を照らし出していた。〇君はその火が消えてしまふと、又新たにマッチを摺すり、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。

「やあ、気味が悪いなあ。土左衛門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋うづまつた遊泳靴ゆうえいぐつの片つぽだつた。そこには又

海艸の中に大きい海綿もころがっていた。しかしその火も消えてしまふと、あたりは前よりも暗くなつてしまつた。

「昼間ほどの獲物はなかつた訣だわけね。」

「獲物？ ああ、あの札か？ あんなものはざらにありはしない。」

僕等は絶え間ない浪の音を後に広い砂浜うしろを引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。

「ここいらにもいろんなものがあるんだらうなあ。」

「もう一度マツチをつけて見ようか？」

「好いよ。……おや、鈴おとの音がするね。」

僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覚かと

思つた為だった。が、實際鈴の音はどこかにしているのに違ひなかつた。僕はもう一度O君にも聞えるかどうか尋ねようとした。すると二三歩遅れていた妻は笑い声に僕等へ話しかけた。

「あたしの木履ぼっくりの鈴が鳴るでしょう。——」

しかし妻は振り返らずとも、草履ぞうりをはいているのに違ひなかつた。

「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いているんです。」
 「奥さんの袂たもとの中で鳴っているんだから、——ああ、Yちゃんの
 おもちやだよ。鈴のついたセルロイドのおもちやだよ。」

O君もこう言つて笑い出した。そのうちに妻は僕等に追いつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常じょうだん談を機会に前

よりも元気に話し出した。

僕はO君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運転手と話をしている夢だった。僕はその夢の中にも確かにこの運転手には会ったことがあると思っていた。が、どこで会ったものかは目の醒めた後もわからなかった。

「それがふと思いで出して見ると、三四年前にたった一度談話筆記に来た婦人記者なんだがね。」

「じゃ女の運転手だったの？」

「いや、勿論男なんだよ。顔だけは唯ただその人になっているんだ。やっぱり一度見たものは頭のどこかに残っているのかな。」

「そうだろうなあ。顔でも印象の強いやつは、……………」

「けれども僕はその人の顔に興味も何もなかつたんだがね。それだけに反つてかえ気味が悪いんだ。何だか意識のしきい闕の外にもいろんなものがあるような気がして、……」

「つまりマッチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるようなものだな。」

僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顔だけははつきり見えるのを発見した。しかし星明りさえ見えないことは前と少しも変らなかつた。僕は又何か無気味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も氣づいたと見え、まだ何とも言わないうちに僕の疑問に返事をした。

「砂のせいですね。そうでしょう？」

妻はりようそで両袖を合せるようにし、広い砂浜をふり返っていた。

「そうらしいね。」

「砂と云うやつは悪戯いたずらものだな。蜃気楼しんきろうもこいつが拵こしらえるんだから。……奥さんはまだ蜃気楼を見ないの？」

「いいえ、この間一度、——何だか青いものが見えたばかりですけどれども。……」

「それだけですよ。きよう僕たちの見たのも。」

僕等は引地川ひきじがわの橋を渡り、東家あずまやの土手の外を歩いて行った。

松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢こずえを鳴らしていた。そこへ背の低い男が一人、足早にこちらへ来るらしかった。僕はふとこの夏見た或錯覚を思い出した。それはやはりこう云う晩にポップ

ラアの枝にかかった紙がヘルメット帽のように見えたのだった。が、その男は錯覚ではなかった。のみならず互に近づくのにつれ、ワイシャツの胸なども見えるようになった。

「何だろう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小声にこう言った後、たちま忽ちピンだと思つたのはまきたばこ巻煙草の火だつたのを発見した。すると妻はたもとくわ袂を銜え、たれ誰よりも先に忍び笑いをし出した。が、その男はわき目もふらずにさっさと僕等とすれ違つて行つた。

「じゃおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は気軽にO君に別れ、松風の音の中を歩いて行つた。その

又松風の音の中には虫の声もかすかにまじっていた。

「おじいさんの金婚式はいつになるんでしょう？」

「おじいさん」と云うのは父のことだった。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいているね？」

「バタはまだ。とどいているのはソウセエジだけ。」

そのうちに僕等は門の前へ——半開きになった門の前へ来ていた。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「婦人公論 第十二年第三号」

1927（昭和2）年3月1日発行

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月24日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

蜃気楼

——或は「続海のほとり」——

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 芥川龍之介
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>